

オリバー・ツイスト

2005(平成17)年9月26日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★★



監督＝ロマン・ポランスキー／脚本＝ロナルド・ハーウッド／原作＝チャールズ・ディケンズ／出演＝バーニー・クラーク／サー・ベン・キングズレー／ハリー・イーデン／ジェイミー・フォアマン／エドワード・ハードウィック／マーク・ストロング／リアン・ロウ（東芝エンタテインメント、東宝東和配給／2005年フランス・イギリス・チェコ映画／129分）

……19世紀の産業革命前後のロンドンを舞台としたイギリスの文豪ディケンズの原作の映画化だが、今どきの日本の若者は、この文豪そのものを知らないのでは……？ 他方、『小さな恋のメロディ』（71年）の美少年マーク・レスターが演じたミュージカル映画『オリバー！』（68年）なら、団塊の世代はよくご存知……？ 『戦場のピアニスト』（02年）のポランスキー監督が製作費80億円を投じたこの作品は、今風のハリウッド映画とは大違いの重圧感漂うもの。見事に再現されたあの時代のロンドンを舞台に、産業革命の嵐の中で翻弄される底辺の子供たちを主人公にした骨太ドラマは見ごたえ十分。その時代背景を勉強しながら、じっくりと味わいたいものだ……。作品賞・監督賞はもとより、オリバーを演じたバーニー・クラーク少年の主演男優賞ノミネートは確実……？

君はチャールズ・ディケンズを知っているか？

私たち団塊世代は、中学、高校、大学時代のある時、本を読むことに狂った時期があり、それぞれ何らかの愛読書を持っているはず。しかし読書離れ、本離れが進んだ日本では、団塊世代のNo.1 人気作家の司馬遼太郎はもとより、日本を代表する文豪、森鷗外や夏目漱石の名作すら読んでいない若者が多いのでは……？

さらに、『嵐が丘』『戦争と平和』『罪と罰』『赤と黒』等々、次々と題名が浮かんでくる有名な世界文学全集作品だって、これらを読んでいる今どきの若者は少ないのでは……？ またブロンテ、トルストイ、ドストエフスキー、スタンダー

ルなどほど有名でない(?) イギリスの19世紀の文豪チャールズ・ディケンズなどは、その名前すら知らないのでは……?

そうだとすれば、この『オリバー・ツイスト』という映画のことを聞いても、それがディケンズの原作の『オリバー・ツイスト』を映画化したものであることもわからない……? ロマン・ポランスキー監督も、日本の若者の文学についての教育レベル・知識レベルがこの程度であることを前提として、日本の若者(バカ者? 失礼!)にもわかる映画を作って下さいね……?

フリーター、ニートの諸君はディケンズを見習おう!

他方、日本の若者もこの映画を観て、①19世紀のロンドンと日本との対比、②産業革命とは何か、③19世紀半ばのロンドンの生活ぶり、とりわけ救貧院なるものの実態、などをじっくりと勉強してもらいたいものだ。

パンフレットによると、1812年生まれのディケンズがこの小説を発表したのは彼が25歳の時の1837年。ディケンズ自身、家計が苦しい家庭の長男だったため、12歳でロンドンの靴墨工場に働きに出された経験を持っているとのこと。そして、働きながら小学校を卒業した彼はその後、速記の仕事などを経て新聞記者になり、小説家への道を志したわけだ。

今や誰でも大学に入れる時代となった豊かな大国ニッポンでは、大学を卒業しても定職につかず、フリーターだニートだと言っている若者諸君が多いが、彼らも少しはこのディケンズを見習う必要があるのでは……?

今なぜこの原作を……?

パンフレットによれば、ポランスキー監督は、自分自身の悲しい体験を真正面から見つめた『戦場のピアニスト』の後、何を撮るかかなり迷ったらしい。その結果、奥さん推薦のディケンズの『オリバー・ツイスト』に決まったとのこと。そして私は全然知らなかったが、この原作は過去25回以上も「映像化」されているとのこと。

しかしそれはテレビが多いようで、有名な映画ではデヴィッド・リーン監督の『オリバー・ツイスト』(48年)とキャロル・リード監督の『オリバー!』(68年)

の2本だけ。この『オリバー！』はミュージカルを映画化したもので、私もテレビ放映で観たことがある。あの『小さな恋のメロディ』（71年）で大人気となったハンサム君のマーク・レスターが主演したものだ。

もっとも私はディケンズの『クリスマス・キャロル』は中学生の頃に読んだが、残念ながら『オリバー・ツイスト』は読んでいなかった。したがって、きちんとしたストーリーは頭に入っていなかったが、この映画を観ているうちに、ああそうだったと思ひ出してくる感じ……？ ポランスキー監督が今、ディケンズの『オリバー・ツイスト』に注目した理由は、パンフレットの中にタップリと……？

産業革命下のロンドンとは？

この映画の時代は19世紀。正確にはディケンズが『オリバー・ツイスト』を書いた1837～39年頃……？ そしてその舞台はロンドン。18世紀後半に世界で最初に産業革命を成し遂げたのはイギリスで、それは次第に周辺先進国に広がっていった。産業革命のプラス面は、資本と労働力を集中し、技術革新によって発明された機械を活用することによって工業化が進み、大量生産が可能となること。他方、マイナス面は、工場の経営者・産業資本家と工場労働者とが明確に分離され、支配と従属の関係が確立してしまうこと。

こんな産業革命の進展状況と資本主義の発展に伴うますますの資本の蓄積、そして労働者の抑圧ぶりを研究して、1860年代以降にまとめられたのが、マルクスの『資本論』。その経済学的なキーワードは「剰余価値」だ。それはともかく、産業革命と資本主義の発展によって新たに生まれた富裕層に対して、底辺の工場労働者たちの実態は……？ そしてこの時代の孤児たちは……？

養育院と救貧院

主人公のオリバー（バーニー・クラーク）は孤児。なぜ彼が孤児になったのかについて詳しいことは語られないが、葬儀屋のサワベリー氏（マイケル・ヒース）に引き取られたオリバーが先輩の少年ノア（クリス・オーヴァートン）から母親のことを侮辱されたことに対してムキになってつかつかっていくところを見ると、オリバーの母親はきっと優しく、いい母親だったはず……。

映画の冒頭、暗い色調で陰鬱な雰囲気の中で描かれる救貧院の実態は興味深い。養育院で育ったオリバーが教区吏のバンプル氏（ジェレミー・スウィフト）に連れられて自分の育った救貧院へ戻されるシーンからこの映画はスタートする。9歳に達したオリバーは、これからこの救貧院で、たくさんの子供たちと集団生活の中で麻屑作りの労働に従事するわけだ。

資本主義の発展が一方で帝国主義を生み、植民地支配という事態を招いたことが資本主義の弊害の1つなら、資本と労働の集積を根本原理とする資本主義の理屈によって必然的に資本家と労働者を分離させるとともに、過酷な労働条件を引き起こしたことがもう1つの資本主義の弊害。もっとも、その後の戦争を中心としたさまざまな犠牲と人類の英知の結集のおかげで（?）、資本主義に対置されていた社会主義・共産主義の思想は基本的に崩壊するとともに、労働条件も飛躍的に改善されてきたことは周知の事実……？

しかし、ディケンズが描いた産業革命のこの時代は、まさにその矛盾が噴出していた時代で、救貧院での待遇は厳しいものだった。まるで奴隷状態のような長い労働時間と貧しい食事。それが救貧院の実態だった……。

そんな中、子供たちはある提案を……？ そして、クジ引きでその代表者となったオリバーがとった行動は……？

スリは一種の芸術・手品……？

万引き、かっぱらい犯罪が増加している日本では、懲役刑しかない現行の窃盗罪の規定（構成要件）では不便なので、新たに罰金刑を設けるべく改正作業が急がれているとのこと。

盗みは最も原始的な犯罪だが、昨日観た『ルパン』（04年）におけるアルセーヌ・ルパンは貴族からのみ高級品を盗むという「哲学」を持っていたし、日本でもねずみ小僧次郎吉や石川五右衛門は金持ちから盗んで庶民に還元するという「こだわり」を持っていた。銃を用いた凶悪な銀行強盗や身体の不自由な年寄りをターゲットとしたかっぱらいなどは倫理的にみても、言語道断な行為であることは明らか。しかし『ルパン』の中でアルセーヌ・ルパンの父親であるテオフラスト・ルパンが息子に「教育」していたように、相手の注意をそらせることによ

て見事にやっつてのける盗みは、一種の芸術であり、手品ともいうべきもの……？

フェイギンの隠れ家の中は……？

法を守るべき弁護士の私がこんなことを言っただけなのかもしれないが、この映画での「ゲーム」を観ていると、心の底からそう思ってしまう。その「ゲーム」が行われるのは、ロンドンの裏通りにあるフェイギン（サー・ベン・キングズレー）率いるスリ集団の隠れ家の中。ここにオリバーを連れてきたのは、フェイギンからその素質を見込まれ、きっと大物になると期待されている大人びた、早業ドジャーとの異名をもつ少年ドジャー（ハリー・イーデン）。葬儀屋のサワベリー氏の家から逃げ出し、7日間も歩き通してロンドンにたどり着き、もはや動けなくなっているオリバーを見つけたドジャーが、オリバーを仲間に引き入れるべく、この隠れ家に連れて来たわけだ。

注目すべき人物の1人がスリの子供たちの総元締めをしている老人フェイギン。彼は独特の哲学を持っている（？）が、その性格は優しく、当然のようにオリバーに食事と眠る場所を与えたうえ、彼がオリバーに語って聞かせる話は十分な説得力がある。そして、毎日「仕事」に出かけていく子供たちとは別メニューで隠れ家内での仕事をフェイギンとともにこなしていたオリバーに対して、「さて今日はゲームをしようか」というフェイギンのかけ声とともに展開されたのが見事な「スリ・ゲーム」……？

パンフレットによると、このシーンのために子供たちは「撮影のひと月ほど前から手品師にスリのテクニックの特訓を受けた。撮影開始後は別の手品師がロンドンから来て訓練を続けたが、手を鍛えるために色んなトランプ手品も習った」とのこと。この「ゲーム」のシーンを含めて撮影当時14歳だったという早業ドジャーのテクニックには、ただ驚嘆するのみ……。

仲間たちはみんな不幸……？

救貧院や葬儀屋のサワベリー氏の下で苦しめられ、ロンドンでやっと仲間たちができたと思ったら、それがかなりヤバイ組織であり、危険人物が支配していることがわかったオリバー。しかし何の力もないオリバーは本来ならば、そのウラ

の社会からオモテ社会へ出ることができないのが当然。現に、オリバーをフェイスギンの隠れ家に連れて行ってくれたドジャーにしても、結果的にオリバーを救出することによって、自分が凶暴なビル（ジェイミー・フォアマン）の手によって犠牲になってしまった女性ナンシー（リアン・ロウ）にしても、いくら本人が努力してもウラ社会から這い上がることは所詮できなかったもの……。

他方、結果的にナンシーを殺し、極悪犯人として指名手配されたビルも、そしてビルと一緒にブラウンロー家への押し込み強盗を実行しようとした仲間のトビー・クラキット（マーク・ストロング）も、まともな仕事では飯が食えなかったから、という弁解が何となく通りそう……？

そう考えると、ビルと少年たちの中に入って、少年スリ団をうまく管理していたフェイスギンは、ホントに心優しい善人のように見えてくる。要するに、そういう時代だったということだ。

オリバーは超ラッキー……？

しかし、オリバーだけはなぜかハッピーエンドに……？ それはなぜだろう？ その最大の要因は、オリバーが生来持っている善なるものによるもの。

オリバーは最初のスリ騒動に巻き込まれた時、ブラウンロー氏からその善良さを見込まれるという幸運を掴むことができた。しかし、孤児となっているものの良き父・母の下に生まれ、生まれながらにして善なるものを持っている少年少女は、あの時代のあのロンドンにもたくさんいたはず……。その中でオリバーだけが幸せを掴むことができたのは、やはりブラウンロー氏の庇護というラッキーがあったから……？ そこらあたりがこの映画を観た後の、議論の論点かも……？

面白いけど重たい、重たいけど面白いイギリス文学もの……？

最近大人気の面白いイギリス文学もの映画は、第1にJ.K. ローリング原作の『ハリー・ポッター』、第2にロアルド・ダール原作の『チャーリーとチョコレート工場』、そして第3に来年3月公開予定のC.S. ルイス原作の『ナルニア国物語』。これらはいずれも単純に楽しめる（？）娯楽大作……？

しかし何とんでもイギリスが世界に誇るべき本家本元のイギリス文学といえ

ば、シェイクスピア。シェイクスピア原作の映画はたくさんつくられており、それぞれに名作だが、シェイクスピア自身が主人公となって登場した『恋におちたシェイクスピア』（98年）はその最高傑作。なお、今年11月にはアル・パチーノ主演で『ヴェニス商人』が公開される。私はその出来を大いに期待しているし、そのストーリーは誰もがよく知っているものだが、シェイクスピアものは面白いけれども重たい……？ 他方、19世紀のイギリスの文豪ディケンズの原作は、彼自身が産業革命が進展していく中で虐げられる立場にただけに、『ハリー・ポッター』や『チャーリーとチョコレート工場』とは全く異なり、いかにも重たい雰囲気のもの。しかし、同時に80億円という膨大な製作費のかかなりの部分をつぎ込んで再現した、あの時代のロンドンの表通りや裏通りの見事なまちなみの中で展開されるこの映画は面白い。やはり、世界を支配した大英帝国だけのことはある、これが底力、ということか……？

またまたアカデミー賞候補作が……？

この『オリバー・ツイスト』は、2002年の『戦場のピアニスト』でカンヌ国際映画祭パルムドール賞やアカデミー賞最優秀監督賞などを獲得したボランスキー監督の3年ぶりの作品。今年のアカデミー賞候補作として現在私が挙げているのは、『シンデレラマン』と『IN HER SHOES（イン・ハー・シューズ）』の2つだが、この『オリバー・ツイスト』も入れないわけにはいかない。

物語のダイナミックス性では『シンデレラマン』。また、姉妹の愛と葛藤や、底辺の子供たちを描いた他の2作品よりも、やはり夫婦愛を描いた『シンデレラマン』の方が一般受けすることもまちがいないだろう。

しかし、この『オリバー・ツイスト』でオリバー役を演じた撮影当時11歳のバーニー・クラーク君の演技は絶賛もの。こりゃひょっとして主演男優賞……？ またフェイギンを演じたサーの称号を持つベン・キングズレーの演技がうまいのは当然だし、早業ドジャーを演じた撮影当時14歳のハリー・イーデン君もひょっとして助演男優賞……？ そういう期待が持てるほどの充実した作品であることは私が保証しておこう……？ 是非あなたの目で確かめてもらいたいものだ。

2005(平成17)年9月27日記